

# 令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

## 「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求めるとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

**1 調査日** 平成31年4月16日（火）

**2 調査対象** 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

### **3 調査内容**

#### (1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

**品川区立上神明小学校**

国 語

正答率が目標値の+5ポイント以上△  
正答率が目標値の-5ポイント未満▼

(1) 各教科の定着状況についての概要

領域		2年	3年	4年	5年	6年
話すこと 聞くこと	目標値	80.0	81.7	62.0	76.7	80.0
	本校正答率	84.2	87.3	68.2	91.7	88.1
	比較	4.2	△5.6	△7.8	△15.0	△8.1
書くこと	目標値	61.0	73.3	61.3	56.7	57.5
	本校正答率	60.0	92.2	64.8	45.8	36.7
	比較	1.0	△18.9	3.5	▼10.9	▼20.8
読むこと	目標値	74.2	60.6	71.7	71.4	65.0
	本校正答率	75.8	63.2	75.8	75.0	62.4
	比較	1.6	2.6	4.1	3.6	2.6
言語	目標値	90.0	77.7	70.4	73.3	71.7
	本校正答率	97.8	84.2	76.5	73.6	63.8
	比較	△7.8	△6.5	△6.1	0.3	▼7.9

全体的には2～5年生は目標値に達している。また3～5年生は「基礎」「活用」とともに、目標値に達している。6年生は全国平均を下回っているが、「活用」はおおむね良好な状況である。領域別に見ると、高学年は「書くこと」に課題が見られるものの、平成30年度と比べると2～5年生では目標値との差が小さくなったり目標値を上回ったりして書く力の向上が認められる。また4年生以上は「漢字の書き」が目標値を下回り、定着が十分ではない状況である。

(2) 具体的な課題

- ①自分の考えを明確にして具体的に文章を書く力
- ②文章を書く際に、事柄の順序に沿って簡単な構成を考える力
- ③情景や登場人物の心情を読み取る力
- ④漢字に関する知識・理解

(3) 課題の原因として考えられること

- ①自分の考えを文章にする学習活動が十分ではない。
- ②文章を書く際の構成の仕方が身に付いていない。
- ③文章を読み、場面や登場人物の気持ちを想像して表現することが身に付いていない。
- ④前学年までに学習した漢字の習得が十分ではない。

(4) 課題解決の方策（取組指標）

- ①国語の時間に限らず、どの教科でも自分の思いや考えを箇条書きや短い文章で書く活動を取り入れる。
- ②中学年からは構成メモや付箋を活用して話の順序を組み立てて文章を書く活動を取り入れる。
- ③文学的な文章の学習では、場面の様子や登場人物の心情を表す言葉に着目して読むことを指導する。心情を表す言葉や心情が読み取れる行動にサイドラインを引くなどして、心情の変化を捉えることができるようにする。

また単元末の授業や家庭学習で、文学的な文章、説明的な文章とともにいろいろな読解問題に取り組みさせる。

- ④朝学習で新出漢字の学習を行い、家庭学習でその日に学習した漢字を練習する。また、ステージごとの小テストや年2回の校内漢字検定を実施して定着を図る。土曜授業日には、辞書を使って言語を調べる活動を行い、日常的に語彙を増やせるよう指導する。

(5) 次年度の数値目標（成果指標）

- ・全学年「基礎」「活用」とともに目標値を上回ることを目指す。
- ・「書くこと」「読むこと」の領域で、目標値を上回ることを目指す。

## (1) 各教科の定着状況についての概要

4年			5年			6年		
地域や市の様子	目標値	68.0	安全を守る活動	目標値	63.8	国土や自然などの様子	目標値	64.4
	本校正答率	69.3		本校正答率	70.8		本校正答率	54.1
	比較	1.3		比較	△7.0		比較	▼10.3
生産や販売	目標値	63.6	生活環境を守る活動	目標値	58.1	農業や水産業	目標値	67.1
	本校正答率	78.5		本校正答率	72.9		本校正答率	53.1
	比較	△14.9		比較	△14.8		比較	▼14.0
			先人の働き	目標値	43.3	工業生産	目標値	64.1
				本校正答率	40.3		本校正答率	50.6
				比較	3.0		比較	▼13.5
			県の様子	目標値	53.1	情報産業や情報化社会	目標値	65.0
				本校正答率	56.3		本校正答率	56.2
				比較	3.2		比較	▼8.8

全体的には4・5年生は目標値を上回っているが、6年生は目標値を下回っている。5・6年生は、多くの情報を整理して必要なことだけを取り出す問題で目標値より低くなる傾向が見られた。平成30年度と比べると、どの学年も正答率と目標値の差が少なくなっているか正答率が目標値以上になっており、学習内容の習熟度が向上していることが認められる。

## (2) 具体的な課題

5年生と6年生は、資料をもとにして考える問題に課題があり、円グラフや棒グラフから情報を読み取る問題については校内正答率が目標値や全国正答率に対して下回る結果が見られた。

- ①資料や知識を使って言葉で表現する力
- ②資料から必要な情報を読み取る力

## (3) 課題の原因として考えられること

- ①社会科に関する知識はある程度あるが、その知識を活用する経験が不足している。
- ②年表や地図、グラフなどの資料を正しく読み取ったり、複数の資料を関連付けて考察したりする学習経験が不十分で、身に付いていない。

## (4) 課題解決の方策（取組指標）

- ①学習の振り返りに、その日に学んだ知識や技能に関する言葉を取り入れて感想や考察を書く活動を行う。また、定期的に授業や家庭学習で知識の定着を図りながら、自分の言葉で知識を表現する学習に取り組んでいく。
- ②地図帳や資料集を活用し、地図やグラフなどの複数の資料を関連付けて丁寧に考える学習に取り組み、情報を読み取る機会を増やす。また、時事問題に関する知識を確認したり、資料をまとめたりする学習活動に取り組む。
- ③教科を横断した学習の取り組みとして、社会科の学習で取り組んだ学習内容を市民科で取り上げたり、算数科の授業でグラフを読み取る学習と関連付けたりして、教科の領域を越えて子どもたちが使える能力を育成する。

## (5) 次年度の数値目標

- ・「記述式」の問題で、目標値を上回ることを目指す。
- ・「資料を読み取る」問題で、目標値を上回ることを目指す。

## 算 数

正答率が目標値の+5ポイント以上△  
正答率が目標値の-5ポイント未満▼

## (1) 各教科の定着状況についての概要

領域		2年	3年	4年	5年	6年
数と計算	目標値	82.9	77.6	74.5	71.8	64.5
	本校正答率	88.9	80.4	84.0	77.6	55.6
	比較	△6.0	2.6	△9.5	△5.8	▼8.9
量と測定	目標値	83.8	63.8	75.0	66.7	70.0
	本校正答率	90.0	62.5	85.1	65.3	59.5
	比較	△6.2	1.3	△10.1	1.4	▼10.5
図形	目標値	68.8	66.7	76.7	56.3	71.0
	本校正答率	68.8	63.7	89.4	53.1	56.0
	比較	0.0	▼3.0	△12.7	3.2	▼15.0
数量関係	目標値			58.0	54.2	46.7
	本校正答率			66.4	47.2	36.7
	比較			△8.4	▼7.0	▼10.0

全体としては2～5年生は目標値に達している。問題の内容としては、「量と測定」「図形」「文章問題」などの問題を特に苦手とすることが読み取れる。平成30年度と比べると、2～5年で正答率と目標値との差が小さくなっているか、正答率が目標値を上回っており、学習内容の習熟度が向上していることが認められる。

## (2) 具体的な課題

- ①四則混合の計算、概数や小数、公約数や公倍数などの性質と計算、文章問題
- ②普遍単位の理解と活用、さまざまな量のイメージ
- ③図形の性質と利用、作図の技能
- ④様々なグラフの読み取りと活用

## (3) 課題の原因として考えられること

- ①既習事項が積み重なっていない。  
正答率が低い問題が、基礎的な部分と応用的な部分にまたがっていることから、低学年時から苦手分野を残している児童と、新しく習った内容の定着が不十分な児童とが存在すると考えられる。
- ②数量や単位の具体的なイメージがもてていない。  
普遍単位の大きさや長さ、時間や時刻、角の大きさ、展開図と組み立てなどのイメージがもてないために、解決の見通しが立たず、誤答が増えてしまったと考えられる。
- ③応用、説明問題に慣れていない。  
基礎的な計算はできて、四則混合の計算や文章問題になると自信を失ってしまったのではないかと考えられる。また、グラフの読み取りや活用、理由の説明など、データを読み取って説明することや記述問題に慣れていなかった可能性が考えられる。

## (4) 課題解決の方策（取組指標）

- ①算数のよさを感じさせる指導の工夫  
普段生活する中では様々なことに興味や意欲を示す児童が多い。算数についても、数学的に考えたり表したりすることのよさを感じさせ、生活に結び付けるような授業の工夫をしていく。
- ②イメージする力を育てる→操作活動の充実  
文章問題や作図、測定に関わる力を伸ばすために、具体的な操作活動を充実させ、より体験的に学べるようにし、問題の状況をイメージできる力を養う。
- ③応用、活用問題を解く機会を増やす  
解決の見通しを立て、順序よく考えさせることで、問題にあきらめずに挑戦させ、解けた、できた喜びを味わわせる。
- ④個人差への対応  
少人数算数、朝のモジュール学習、未来塾などを利用し一人一人に合った学習ができる機会を充実させる。

## (5) 次年度の数値目標

- ・全学年、「基礎」はすべて目標値に達することを目指す。
- ・全学年「活用」は目標値に達しない問題を今年度よりも少なくする。

## (1) 各教科の定着状況についての概要

領域		4年	5年	6年
物質・エネルギー	目標値	59.3	62.0	47.5
	本校正答率	58.5	65.8	35.3
	比較	0.8	3.8	▼12.2
生命・地球	目標値	62.1	71.6	66.1
	本校正答率	62.5	73.7	53.5
	比較	0.4	2.1	▼12.6

4・5年生は、「基礎」「活用」とともに、正答率が目標値と同程度であった。6年生は5年生の基礎的な内容の定着が不十分なため、活用問題に対応できていないと考えられる。平成30年度と比べると、どの学年も正答率と目標値との差が小さくなっているか、正答率が目標値を上回っており、学習内容の習熟度が向上していることが認められる。

## (2) 具体的な課題

- ① 基礎的な用語の意味の理解と知識の定着
- ② 実験・観察の技能、温度計や顕微鏡等器具の使用法の理解
- ③ 実験・観察結果から考察し、それを説明する力

## (3) 課題の原因として考えられること

- ① 理科に関する基礎的な用語の知識はある程度あるが、それを正しく使って話したり書いたりする経験が不足している。
- ② 実験・観察の経験はあるが、使用する実験器具や実験・観察方法、実験・観察の記録を整理してノートにまとめたり、プリント等で活用問題に取り組んだりする経験が十分でない。
- ③ 実験・観察結果の予想と結果を比べて考察し、それを文章で書いたり口頭で説明したりする経験が不足している。

## (4) 課題解決の方策（取組指標）

- ① 授業中に既習の用語を正しく使って説明したり、発表させたりする。また、単元末に学習した用語を確認したり、学んだことをノートにまとめたりする時間をとる。さらに問題の形式になれるため、演習プリントを活用して、授業や家庭学習で取り組ませる。
- ② 実験・観察をする際には、用具の正しい使い方を丁寧に指導するとともに、児童が自分で用具を使う機会を繰り返し設ける。
- ③ 実験・観察をする際には、予想、方法、結果、考察を整理してノートに書かせたり、お互いにノートの書き方を見せ合ったり、意見を交流し合ったりして人に説明する力を付けさせる。

## (5) 次年度の数値目標

- ・全学年、「基礎」「活用」とともに目標値を上回ることを目指す。